

希望のために

天をかける姫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、狛枝凪斗が絶望に落ちなければ

もし、狛枝凪斗が苗木誠に会っていたら

どうなっていたのだろうか。

目次

生ききった希望

1

希望的展開か絶望的展開か。

5

生ききつた希望

人の人生を3つのことばで表すと

知恵 力 それともうひとつ、某ゲームなら、勇気と答えてしまうであろう、だがそこは、違って、運である

運も実力のひとつだと聞いたことはないだろうか

ある人やない人でも結構。さて、この3つを%で例えるとどうなるのだろうか、すこし考えてみてほしい

人それぞれいろんな答えがただろう。

これは僕個人の答えであるけど

力15%

知恵15%

運70%

このようになる

あくまで僕の低脳で全然してない経験上からの意見だから

耳を傾けなくても大丈夫だよ。

そこで本題に入ろう

先に自己紹介と行こうか

僕の名前は

コマエツカサギト
狛枝風斗

希望ヶ峰学園第七十七期生。超高校級の幸運として、この学園に入学して、卒業をす
るはずだった。するはずだったってわけでもなくて僕は、卒業出来たのたけれど

そう、他のみんなは無事卒業という訳には行かなかつた。

卒業する時には僕は、最低で醜くて殺して存在を無くして欲しいくらい絶望的に絶望
な、希望ではない彼らがであつた。

え？なんで僕はならなかつたって？

それはね、次話から分かるんじゃないかな？

まあ一言言うのであれば、卒業前に幸運は幸運を呼び希望を、見据えるとだけ、言っ
ておこうかな

「おい、狛枝、お前はいつも意味わからないことばかりいうけど、これだけはハッキリし

ろよ！なんのために生きてるんだお前は！」

何のため？決まってるじゃないかそんなの

「僕はね。希望のためならなんでもするんだよ、希望のためにね」

「希望…か、希望ってなんだ？お前にとつて希望とはなんなんだ？」

さすが超高校級の希望、日向誠くん。最近まで表すことの出来なかつた難問をぶつけてくるね

「希望はね、あれだよ」

そう言つて、僕は、指を指した

日向は指さす方に顔を向けると

ああ。と納得したかのように

こちらへ顔を向ける

「なるほどな。お前らしくはないな」

「どうしてだよー」

「しらん。自分で考えろー」

そう。僕がちやんと希望を、見据えることが出来たからこんな未来があるのだろう
そう考えるとたしかに僕らしくなかつたかな

なら、言い換えようか、僕らしい答えに

「僕はね超高校級の希望的幸運だね。」

さてこれから始まる物語は。絶望に屈指ることの無い希望の道筋を歩いた僕達の絶望てき、ものがたりである。

「希望は前に進んだ、か。いい言葉だね」

END

希望的展開か絶望的展開か。

皆はパラレルワールドというものを信じるだろうか。

パラレルワールド…別名平行世界

ある世界から分岐し、それに並行して存在する別の世界を指す。並行宇宙、並行時空とも捉えられることが多い

なぜこのようなことを聞くのか。

そう思い人はたくさんいるだろうか？

僕もその立場ならそう思うだろう。

だが、いまから言う事実をきくと君は納得するだろう。

体育館

「私はね！超高校級のギャルの江ノ島盾子よ！」

……

「僕はね、超高校級の幸運の苗木誠だよ、よろしくね狛枝くん」

……
「私は超高校級の希望、カムクライズル」

……
「私は、超高校級のアイドルの舞園さやかです！よろしくです！狛枝くん！」

……
「僕は、超高校級の探偵の最原終一だよ」

……
「私は最原くんと同じ超高校級の探偵、霧切響子よ、よろしく」

……
「私は、超高校級のゲーマーの七海千秋……だと……おもうよ……？」

……
「私のなまえなんて興味ないだろうけど……私は……超高校級の小説家、ふっ腐川冬子よ

！」

……
「俺は超高校級のメカニック！左右田和一！覚えてけよ！」

……

「私は超高校級のピアニストの赤松楓です！よろしく！」

……

「僕の名前は真宮寺是清、超高校級の民俗学者と呼ばれているヨ、よろしく」

……

「私は超高校級ギャンプラーのセレスティア・ルーデンベルクですわ、以後お見知りおきを」

……

「私は超高校級の戦場、戦刃むくろ。」

……

「おれは超高校級の暴走族の大和田紋土だ！」

……

「宇宙轟く百田様たア！おれのことだ！おれは超高校級の宇宙飛行士！百田解斗さまだ！よろしくな！」

……

個性が濃いかどうかそういうレベルなのかなこれは

死んだはずの人とか沢山いるね

なんて素晴らしい運なんだろうか僕は

今度こそ。今度こそ。

希望のみんなを、守るよ

「僕はね、超高校級の幸運なんだ。いずれ超高校級の希望になる狛枝凪斗だよ、みんなよろしくね」

さて、そろそろ来るんだろう、モノクマ

来るならおいでよ。絶望は希望に屈しないよ

僕はそう気持ちを固く、頑固たる決意を胸しまい込んでいると

「ねえ、狛枝くん」

ふいにぼくの大好きな希望の苗木くんが話をかけてきた

「さつき、超高校級の希望って言ってたけど、希望って、カムクライズルくんのような感

じょ。」

…なるほどね、たしかにその疑問は答えなければね、

けど、勘ぐられたくないね、なら

「僕の理想と同じって訳では無いと思うんだ、そこにいるカムクラ君に聞けばわからんじゃないかな？」

「その質問に答えましょう」

カムクライズルも会話に入ってきた

「私の超高校級の希望は、単にたくさんの超高校級を寄せ集めたに過ぎないです。とある学者たちが、希望ヶ峰学園の希望の生徒達の才能をひとつにして本当の希望を創ろうとしたに過ぎません。なんて欲深くツマライなのでしょうかね」

さすがの苗木くんも苦笑いで

「そつ…そうなんだ。」の一言だった

「あー、マイクテスマイクテス！…大丈夫？聞こえてるよね？」

ようやくお出ましのようだ

これから始まるんだね？希望と絶望を巡るコロシアイが…

END